

内閣府特命担当大臣賞

南の島の思い 北の四島の希望に

せそこらん
瀬底 蘭

きたなかぐすくそんりつきたなかぐすく
北中城村立北中城中学校1年(沖縄県)



「2月7日」。カレンダーの数字が赤くなっているわけでもない、この日の存在の意味、大切さを去年の夏、私は初めて知ることになりました。そして、その日と向き合うには、沖縄県民の私にとって忘れてはいけない「5月15日」という日の意味を改めて考えてみる必要がありました。

私の両親が生まれる少し前、私の祖父母や沖縄の人は、日本人でありながら日本人として認めてもらえない時代がありました。ドル紙幣やコインを手に買い物をし、日本人なのに本土への進学や就学、甲子園出場でさえもパスポートが必要だったそうです。そんな沖縄が正式に日本となった日が、昭和47年5月15日。沖縄の人達が日本人と認められた、その日が「沖縄復帰記念日」なのです。

そんな過去を持つ沖縄で生まれ育った私は、「北方領土について勉強してみない?」と現地研修会に行くチャンスをいただきました。そして初めて向き合うことになった北方領土問題。研修出発を前にネットなどで調べていく中、日本なのに日本人が住むことができない場所、故郷なのに帰れない場所、そんな理不尽な現実が71年間ずっと続いている場所。それが択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島。その四つの島からなる北方領土の返還を願い、「2月7日」が北方領土の日として制定されたことを知ったのです。でも実際現地に赴き、手を伸ばせば届きそうな距離で、元島民の方から聞く北方領土問題の経緯や現状、当時の苦しみ、故郷を強く思い続ける気持ち、パソコンの画面からでは決して感じ取れなかった北方領土問題を目の当たりにした瞬間でした。それまで「北方領土」のフレーズを新聞やニュース、授業の中で何度も聴いていたはずなのに、立ち止まれなかった自分に反省の気持ちが押し寄せてきました。ここにも戦争が引き金となって、苦しい思いをし続けている人達がいたんだ。国同士の歴史的な背景の裏で日本の北と南の端の小さな島国の人々が振り回されている事実を覚えました。

しかし、私達は決して悲観的にも、単なる傍観者になるてはいけません。「沖縄諸島と北方四島」どちらも、大切な故郷を奪われたり、特別な環境で生きてきた者同士だからこそ、互いの気持ちを理解し力になれることが、きっとあるはずなのです。

私達の沖縄に「チャンプルー」という言葉があります。「混ぜる」という意味です。復帰から44年、沖縄独自の文化にアメリカの文化。そして復帰後、新たに入ってきた本土の文化などがうまくチャンプルーされ、今日の沖縄が成り立っています。先に返還された沖縄の私達だからこそ、この特殊な歴史的背景の重みを理解し、祖先やルーツに誇りを持ち、新しいものと調和を図りながら幸せに生きていく姿で、北方領土を故郷に持つ人々、その返還を願うすべての人々の希望になりたい。北方領土と一番離れているからこそ、気持ちは一番近くにいたいのです。研修中、返還祈念シンボル像の真ん中に返還を祈る灯火を見ました。それは、沖縄の復帰が実現した年に、日本最南端の波照間島で採火され届けられたものだそうです。その灯火には、私達南の島から北方領土の返還を願う気持ちだけでなく、返還後の幸せを祈る気持ちも一緒に灯り続けているのだと思いました。

さあ、次は北方四島の番です。私達南の島の思いが、どうか北の四島の希望になりますように、返還祈念の文字が祈る祈念から記す記念に変わりますように、そしていつか必ず2月7日「北方領土の日」が「北方領土返還の日」になることを心から願っています。

話し合いで

おかだ いくみ
岡田 郁実

うなんしりつきすき
雲南市立木次中学校3年(島根県)



北方領土。北海道の北東、根室からすぐ見えるところに浮かぶ島々です。私は小学校で初めて択捉島、色丹島、国後島、歯舞群島という島の名前や北方領土という言葉を知りました。同時に「竹島」の領土問題や「尖閣諸島」にも領土をめぐる問題があることを知りました。私は母が北海道の標茶町出身で、毎年北海道を訪れています。だから、友達より北方領土問題は身近なものだと思っていました。北方領土という言葉を知り、島々の名前を覚えてただけで領土問題を理解したつもりでした。

そんな私を変えたのは、社会の授業で出会った「メチのいた島」という絵本と「ジョバンニの島」というアニメ映画でした。

「メチのいた島」は、私の住む島根県の竹島にいた「メチ」と隠岐の人達との交流が描かれています。メチとはニホンアシカのことで、竹島で漁をしていた頃から韓国に不法占拠されるまでのことが描かれています。一方、「ジョバンニの島」は、北方領土がソ連軍に占領された時の話です。どちらも子供の目線で描かれていて、領土問題をとても身近に感じることができました。

この二つの作品は、私達が領土問題を考えていく上で、とても重要なものだと思います。絵や映像があることで、文字を見るよりはるかに当手を想像しやすくなります。また、本や資料のように堅苦しくもなく、それらでは伝えきれない、人々の表情の変化など、細かいところまで伝わります。実際に私も「ジョバンニの島」を観て、北方領土問題についてたくさんの勘違いをしていたことに気が付きました。この映画を観るまで、ソ連軍が島に着いたらすぐに、日本人は本土に送られたのだと思っていました。しかし、実際には島の子供達とロシア人の子供達が一緒に遊び、次第に仲良くなり、お互いの言葉も覚えて意思の疎通もできていました。ソ連軍の兵士も無差別に攻撃していたわけではなく、ロシアの人達が悪い人ばかりではないことをわかりました。

しかし、私の想像よりも悪いこともありました。島に住んでいた人達は、島を追い出された後、樺太に連れて行かれたのです。樺太へ行く途中の船でも、到着してからも、多くの人々が亡くなったことを知りました。それは私にとって、とてもショックなことでした。ロシアの人達が島を占領するためには、島民を追い出さなければいけません。そのために使った方法が武力でした。

そして竹島も現在、韓国の警備隊が武力で不法に占拠しています。「武力」、それは日本が戦後一度も使っていない力です。

日本国憲法第九条では、日本は国際紛争を解決する手段としては、武力を行使しないと定められています。つまり、今の日本が領土問題を解決するには、ねばり強く話し合うしかありません。いや、憲法に書かれていなくても、どの国でも話し合いで解決するべきです。しかし、それを実行している国はそう多くはありません。それほど武力を使わずに問題を解決するという事は、とても難しく、とても素晴らしいことだと思います。武力を使わずに話し合いを続けていけば、きっと、きっと世界は平和になるはずです。

二つの作品を観た後、母と話をしました。北海道ではニュースでよく北方領土のことが伝えられ、母の友人の中には祖父母が元島民という人もいたそうです。標茶町にも所々に北方領土の返還を求める看板があります。できることはまだ少ないですが、母のように話を聞ける人が身近にいて、北海道にも行けるということを生かし、これからも領土問題について学び、考え続けていきます。

北方領土を守るために

かわはら しんたろう
河原 慎太郎

ならじょしだいがくふぞくちゅうとうきょういく
奈良女子大学附属中等教育学校3年(奈良県)



皆さん、この数字「16」は何を意味するかご存じですか。「16」は、現在までの日露北方領土交渉の回数を表しています。私は「16」の数字の意味することについてスピーチしたいと思います。

私は北方領土問題を解決するためには、まず日本とロシアの立場を理解する必要があると思います。ロシアは、領土問題は解決済みとしているためもう協議する意思はないと主張します。しかし、大統領はロシアがウクライナの情勢問題で世界から孤立しているため、お互いが損しないなら話し合いたいという気持ちを持っています。また、ロシアは、EUとアメリカから経済制裁を受けているため、日本からの経済協力を求めています。そのため、ロシア政府は1956年に結ばれた「日ソ共同宣言」通りに歯舞群島と色丹島については返還する意向を示しています。それに対して、日本政府は四島返還を求めています。ロシアの意向が強く全島返還の実現はほど遠く進まず、二島返還についてはほぼ確定しているのですが、それは日本国民の意思とは合いません。

以上のことから、北方領土返還には複雑な問題を抱えています。そんな中で私は三つの全島返還のプランを考えました。一つ目は、ロシアから先に二島を返還してもらい、後の二島については百年という期限を設けて全島を返還してもらおうという考えです。これはかつて香港が、イギリス領から中国に返還された同じ道筋です。この考えの長所は、百年という長い年月は、ロシアの人の感情を和らげながら四島を返還してもらおうということです。しかし、香港の場合は支配していたイギリスが遠く統治に不便であったために返還が容易でしたが、北方領土はロシアに近いので、同じような方法では解決できないと思われる。

二つ目は、大統領の側近の外交官と信頼関係を築き、全島を返還してもらおうという考えです。これはかつて、エリツィン元大統領との領土問題を協議した際、元大統領は全島返還の提案でほぼ了承しましたが側近の外交官

が拒否したために提案が却下された過去があったからです。そのうえ、元大統領の時代に交渉していた日本の元首相がロシアと親交を深めていたのにもかかわらず、政権交代によって交渉人が替わり、領土問題の解決が後回しになりました。政権交代により交渉人が替わると、再度ロシアの外交官と信頼関係を築くには時間がかかると思われます。

三つ目は、日本の首相が提言した8項目の計画を守って、全島を返還してもらおうという考えです。この項目は、エネルギー開発や都市インフラの整備など経済分野での協力が中心であり、無農薬栽培などの農業支援や油田開発などは、日本企業の実績がある分野であり、政府も実現性が高いと見えています。しかし、日本にとってロシアとの経済協力は大きな賭けです。領土問題でロシア政府の前向きな姿勢を引き出すかもしれませんが、経済協力ばかりが優先され、領土問題の解決が後回しになる可能性があります。

以上のことから私は、日本の交渉人を元外交官や元首相など、国内外に信頼があり影響力のある人物を複数固定し、日本が提言した8項目の計画をロシアで実践して信頼度を高め、二島を先に返還してもらい、同時にあとの二島の百年後の返還の条約を結び、四島全てを返還してもらおうという三つのプランを合わせた考えを進めたいです。このことで、日本国民全体の夢や悲願が達成されることを期待しています。

コタンの人々のために

さかい ゆうみ
坂井 友美

こうべしりつありま
神戸市立有馬中学校3年(兵庫県)



私は吹奏楽部に入っていました。皆さんは「コタンの雪」という曲を知っているでしょうか？

コタンとはアイヌ語で「村」という意味です。この曲は、私達が昨年吹奏楽コンクールで演奏した曲です。北海道の原野に降り積もる雪の中、神に祈りをささげながら力強く生きる村の人々をイメージして作られています。私は、この曲と出会い、イメージを膨らませる中で北方領土の問題に興味を持ちました。

昨年、戦後71年を迎えました。

北方領土にどれだけの島民がいたのか。アイヌの人もいたのではないかと。今も、故郷に戻れず、悲しくつらい思いをしている人がどれだけいるのか、知らない人が多くなっていると思います。

私はただ演奏するだけではなく、コタンに生きるアイヌの人々のことを思い、故郷を追われ、戻ることを許されない理不尽さに怒りを感じました。

今、私には「なぜ日本とロシアが北方領土をめぐる対立しなければならないのか」という疑問があります。

明治8年に日露間で調印された「千島・樺太交換条約」により、アイヌの人を含め千島列島が日本領であることが明らかとなり、そこに住む人々はその地で生活を営み、思い出を積み上げました。そして、日本がポツダム宣言を受諾し、降伏した3日後の昭和20年8月18日、ソ連軍は占守島に侵入してきました。文字通り夜襲によってでした。

戦争が終わったにも関わらず戦い、この地で命を失った人々がいました。日本人も死に、ロシア人も死んだ。何と理不尽なことだろうか。

その後、サンフランシスコ平和条約により日本は千島列島を放棄しました。しかし、北方領土は我が国固有の領土であり、放棄はしていません。まして、この条約に調印していないソ連が占領するのはおかしいと思います。

「コタンの雪」の美しい旋律を思い浮かべると、国と国との争いごとよりも、コタンで暮らす人々に対する思いが

大きくなります。突然武器により住む場所を奪われ、アイヌの人も、日本人も、70年以上もの間故郷に帰ることを許されない。先祖への墓参りもできず、自分のルーツを失い、新たな生活を余儀なくさせられる。その悔しさは、誰に受け止めてもらったらいだろうか。国の指導者とは、何をどうすべき人なのであろうか。

昨年12月、プーチン大統領が来日しました。しかし北方領土問題解決にあまり進展はありませんでした。私は島民の方々のために、歴史的事実が正しく認識された、即時返還を求める具体策を検討し実行してほしいです。

さらに、北方領土に帰ることができない島民の悔しい思いやその歴史を、是非ロシアの国民の方々に知ってもらいたいです。その思いに寄り添ってもらえるロシアの人が一人でも増えてほしいと思います。もちろん、北方領土の問題を解決していくために、私達自身がこの問題について学び、理解を深め、自分のこととして考え、協力していくことが一番大切だと思います。

今もつらい思いをしている島民の方々の力に少しでもなれるように、北方領土のことを学び、たくさんの人に伝えていきたいと思っています。ありがとうございました。

美しい心を持つことの大切さ

たかや とうか
高屋 瞳華

なんたんしりつそのへ
南丹市立園部中学校1年(京都府)



「元島民のご家族は、もうここへは来ることはできないかもしれない。」

この言葉は、5年前に私の学校の先輩が、北方領土の国後島に行かれた時のものです。国後島には日本人墓地が今でも残されています。そのお墓参りの時に先輩が言われたこの言葉が、私の心の中にずっと残って離れません。

ビザなし交流で、先輩方が国後島に渡られたのは5年前です。その時と比べても、国後島の道路や施設はどんどん変化しています。ニュースなどを見ても、ソ連がこの島は「自分のもの」として本格的に開発しようとしていることがわかります。でも最初、私の気持ちは単に「島を返してはもらえないんだ。」という単純なものでした。本当はもっともっと深い問題であるということ、私は何も知りませんでした。

島を返してはもらえないということは、単に土地が奪われたということだけではなく、故郷や思い出を全部奪われたに等しいのです。心を奪われたと言ってもいいかもしれません。そんなソ連の人のことを私は「日本人の心を奪った悪い人達」というふうに思っていました。実際に「領土問題は存在しない。」と来日したプーチン大統領が言った時、元島民の方はどんな思いで聞いておられたのでしょうか。本当に辛い気持ちになりました。

そんな時、国後島に行かれた先輩の話聞いたのです。その先輩は、ヒグマが近くにいるので、急いで墓地を離れなくてはならないのに、どうしてもしっかりと手を合わせたいと話されたそうです。その思いやりあふれる行動を私は「美しい」と思いました。またこんな話も聞きました。あるソ連の方が「国がこの島を日本に返す決断をしたら、私はそれに従います。でもそうなると私には行くところがないのです。」と話されたそうです。それでも、その方は訪れていった日本人を歓迎し、日本の技術・文化・教育制度を尊敬していると話してくださったそうです。

先輩やそのソ連の方のように「お互いを尊敬し、思い

やりと美しい心を持つこと」。これが、北方領土の問題を解決するために私が考えた方法です。

かつて、日本とソ連が強い緊張関係にあった時、一人の少年を救うために両国が歩み寄った出来事がありました。1990年のコンスタンチンくんを救う両国の協力のことです。大やけどを負った彼の命は、サハリンの病院では救う手立てがなく、その時サハリンを訪れていた日本人が彼の病状を知り、北海道庁に連絡、その情報は直ちに外務省に伝わったそうです。あと70時間で命が消えてしまうという状況を乗り切るために、両国の関係者が動き、ついに日本の医師を乗せた日本の飛行機がサハリンへ出発、上陸。ビザを持たないコンスタンチンくん一家が日本への「仮上陸」を認められ、日本の飛行機で来日することができたのです。その後、札幌医大に搬送された彼は、懸命な医療・看護の元、危機を脱出しました。彼の医療費は日本人から集まった約1億円もの募金でまかなわれたばかりでなく、残ったお金を元に、毎年北海道とサハリンとの間で、医療技術の勉強会が開かれているそうです。

「元島民のご家族はもう、ここへは来ることはできないかもしれない。」

そんな悲しい思いはさせたくない。これは、どんな国の人でも同じように持つ「美しい気持ち」だと思います。日本とソ連との間にある北方領土の問題の解決は簡単ではありませんが、私はお互いをよく知り、お互いを思いやること、そしてその気持ちを私は持ち続け、お互いの納得の下、北方領土が日本に帰って来た時には、ソ連の人達の心を大切にされた協力や交流を進めていく日本人の一人になりたいと思います。

蜃気楼にしないために

やまもと ゆうだい

山本 雄大

ひこねしりついなえ
彦根市立稲枝中学校3年(滋賀県)

戦後70年を迎えた一昨年、年明けから入院生活を送っていた当時97歳の祖父から戦争体験を聞いたのが、僕が北方領土について興味を持ったきっかけでした。昭和18年8月、軍の分隊長として歯舞群島の主島である志発島に上陸して2年後、島で終戦を迎え、その後ソ連軍に志発島から国後島、樺太、沿海州ポートワニ港を経てシベリアへ抑留された経験を持つ祖父は、生きているうちに孫である僕と一緒にいた北方領土の地を再び訪れたいと言っていました。そのためにも一日も早い北方四島返還を心から願っていた祖父でしたが、残念ながらその夏帰らぬ人となってしまいました。そして僕は昨年の3月「生きているうちに一緒にあの地へ」と祖父があれば願っていた北方領土の地を、滋賀県民会議主催の根室市からの現地視察研修という形で目の当たりにすることになったのです。

納沙布岬、北方館の望遠鏡から眺めた北方領土の地にはロシア軍の基地や壊れた漁船、壊れた灯台などがあり、「北方領土はロシアに実効支配されているのだ」という現実を目の当たりに、現実を実感させられるものでした。また北方館の方から、「自国の領土なのにお金を支払って漁をしなければならない上、漁のできる時期も制限されている」という漁業についてのロシアの支配を感じさせられる話を聞き、驚きと怒りを感じざるを得ませんでした。

ただ、島に住むロシア人達も日本人との交流で少しずつ変わってきているそうで、当初ロシア人はゴミを決まった場所に捨てず荒れていた島が、日本人との交流でゴミをきちんと捨てるなど改善され、少しずつきれいになってきているという話も聞きました。この話からも、島のロシア人達との交流は重要で、今後一層交流を深め、より良い関係を築いていくことの大切さを感じました。現実にも今、島にはロシア人が住んでいて、無理矢理追い出すように返還をせまったら、今度はかつて日本人が味わった悲しみを相手に押しつけることになってしまうでしょう。

しかしロシア政府はこうしている間にも施設を次々に建設し、定住者を増やし、実効支配の既成事実を強化しているのです。日本も早急に対応をし、北方領土は歴史的に見ても日本固有の領土であるということを強く主張し続けなければならないと痛感しました。また、日本の担当大臣の任期が短いのも問題で、担当大臣が代わるたび、前大臣の際決まったこともロシア側に無効にされてしまうというような理不尽な現実が起こっているようなので、短い任期で担当大臣が頻繁に交代されないようにする必要があるのではないのでしょうか。

現地視察研修を通して感じたのは、自国の領土である北方領土を対岸からや船上からしか眺められず、一歩たりともその土地を自由に踏むことのできない現実を目の当たりにして、これから大人になる僕達が現地で学んだ悔しい現実を、声を上げて皆に伝えていき、一日も早い北方四島返還を実現するために行動していかなければならないということです。たった4日間の体験ですが、強く感じた矛盾と憤りを元島民やその家族、そして僕の祖父のようなかつて戦時中、島ですごした人達はどう感じ、返還を願っているのかと日本国民皆さんに想像してもらいたいです。彼らは皆、高齢になり、一日も早い北方四島返還を70年以上も待ちわびています。急がねばなりません。

北方領土は日本固有の領土なのです。しかし今のままではすぐそこにあるのに到達できない蜃気楼のようではありませんか。北方領土は蜃気楼などではなく、日本の国土としてそこに存在するのだと、僕は声を大にして言いたいです。再び日本固有の領土として日本人がその地を踏めるその日まで、一人でも多く声を上げ続けようではありませんか。未来を担う僕達の声で北方四島返還を必ず実現すると今は亡き祖父の墓前に、そう僕は誓いたいです。

「会話」でつなぐ国と心

ふじもと ゆみな
藤本 弓奈もとやまちょうりつれいほく
本山町立嶺北中学校2年(高知県)

「近い!たった3.7キロメートル先。なぜ行けなくなったんだらう。日本のものなのに…。」私は自分から何かに挑戦することが苦手で、消極的な性格を変えたい!という強い思いから、この北方領土青少年等現地支援視察事業に応募しました。そして、初めて北方領土を目にし、4日間、北方領土問題についてたくさんのことを学びました。

「北海道の東に位置する歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島は日本固有の領土で、北方領土と呼ばれていません。北方領土は、第二次世界大戦の終結後にソ連に占領され、ソ連の解体後もロシア連邦によって不法に占拠されています。日本は、ロシア連邦に北方領土の返還を求め続けていますが、実現していません。」私が使っている地理の教科書には、北方領土問題がこう記されています。こんなに大きな問題が、原稿用紙わずか八行に収まってしまうのです。

ロシア人に家を奪われ追い出されたこと。馬小屋で生活したこと。島から逃げ出す時、死んでしまった人がいること。これらは、元島民の方から聞いた事実です。教科書には載っていないこの事実を聞いた時、私はとても大きな衝撃を受けました。そして、「もし島が返ってきたら、必ず行く!日本全国の方に来てもらって、島を案内したい。」という、元島民の方のこの言葉に、私は、少しでも早く、是非実現させてあげたい…と、強く願うようになりました。

この事業をきっかけに、私は高知に帰ってきてからも、インターネットや資料を使って北方領土問題について調べてみました。そして、問題解決のためには、「会話」をすることが何より大切だという結論にたどり着きました。

皆さんは、坂本龍馬という人物を知っていますか?彼は、私と同じ高知県出身で、仲の悪かった薩摩藩と長州藩の仲を取り持ち薩長同盟を結ばせた人物です。薩摩と長州、今の日本とロシアの関係と似ていると思いませんか?龍馬は、一体どうやって同盟を結ばせたのでしょうか?両藩とたくさんの「会話」をしたのです。相手の話をよく聞き、どうすることが一番良いのかを考え、必死に説得し、

同盟を結ばせたのです。「会話」が歴史を動かしたのです。

9月2日、安倍総理大臣とプーチン大統領は、ウラジオストックの日露首脳会談で、北方領土問題について、実際に相手と顔を合わせて話し合いをしました。私が大切だと思っている「会話」を実行したのです。しかし、今までに幾度となく行われている首脳会談ですが、未だ、問題解決には至っていません。

日本の考えを押し付けるのではなく、ロシア人の思いや考えも知った上で、何度も何度も「会話」を繰り返し、両国ともが納得できる方法を見つけた時、それが真の問題解決になるのではないのでしょうか。

私一人では、この北方領土問題を解決させる力はありません。しかし、龍馬が、武市半平太や中岡慎太郎、勝海舟と一緒に時代を動かしたように、私も、仲間と共に、この北方領土問題について考え、たくさんの人との「会話」を通して、問題解決への糸口を見つけていきたいと考えています。

私はこの北方領土視察で、初対面の島根県の中学生や現地の方達、同じ中学校の先輩や後輩と、たくさんの「会話」をしました。そのことが、私にとって大きな自信となり、「会話」は、人の心や周りの環境を変える大きな力があることを実感しました。

私が根室で学んだこと、実際に北方領土を見て感じたこと、元島民の方から聞いた事実、インターネットなどを使って自分で調べた内容、これら全てから学んだことを、積極的に仲間に伝え、「会話」していくことが、問題解決への一歩になる!

そう信じ、これからも行動していきます。

北方領土のこれからと三つのプラン

わかばら りょう
若原 瞭ひがしやまとしりつだいに
東大和市立第二中学校3年(東京都)

「日本でない日本」。総面積は東京都の二倍を越え、豊かな自然と資源を持つ、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、このような不思議な呼び方が似合っています。

1945年8月、突如ソ連が日本に宣戦布告し、この北方の島々にも戦火は及びました。戦後もソ連は占領を続け、日ソ共同宣言による国交の回復、ソ連の崩壊、そして戦後70年を過ぎた今でも、島々は北方領土と呼ばれ、日本から切り離されたままなのです。

私は、この問題は、平和的に、日露政府のしっかりとした対話によって解決しなければならないと考えます。現在、世界中で領土問題が発生していますが、武力によって解決しようとしている例が多くあります。しかし、武力による解決は、真の解決にはなりません。何よりも、70年前の戦闘から始まった北方領土問題を力で解決しようとすれば、新たな問題を生むだけです。歯舞、色丹、国後、択捉と、段階的に日本への返還を行うなど、時間がかかっても、日露政府が双方ともに納得いく深い対話を実現するべきです。

そして、ひと言で「返還」と言っても、それは決して容易ではないでしょう。本当に大切なのは返還後の対応です。そこで私は、返還後の三つのプランを考えました。

まず第一に、現在住んでいるロシアの方々の人権を日本政府が保障し、そのままとどまるのも、ロシアに帰るのも自由とすることです。とどまった場合には、土地の権利を守り、国内で弱い立場にならないようにしなければなりません。施設や標識には日本語とロシア語二つの言語で表示をするなど、日本人とロシア人が平等に暮らせるように努力することが大切です。

二つ目は、産業をより発展させることです。北方領土を含むロシアの極東地域は、あまり経済が発展していない、という新聞記事を読みました。実際に住んでいる方の中には、日本の高い技術が魅力で、島々を日本に返還することに賛成という声もあるそうです。水産資源の

加工や工場の誘致など工業を発展させ、豊かな自然を利用した国立公園の整備をするなど観光業を発展させる。せっかく返還されたものの過疎化してしまった、という事態にならないよう、産業の発展は非常に重要です。

三つ目は、北方領土の歴史を伝える資料館をつくることです。択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つに機能を分散させて設立し、見学する人がより北方領土について関心を深められるような工夫も、必要なのです。アイヌの人々の時代から日本の統治、そして戦争、返還への道。島々のたどった歴史は、決して忘れてはいけなく、風化させてはいけなくのものです。

以上が私の三つのプランです。北方領土の返還にあたって重要なことは、日本かロシア、どちらかだけに有利にならず、両国が協力し歩み寄ることによって取り決めをすることです。

戦後100年を迎える時に、世界中で販売される地図の択捉、国後、色丹、歯舞。この四つの島々が日本と同じ色に塗られているか、それとも別の色かは、政治や外交だけの問題ではありません。無知そして無関心は解決を阻害する一番の障壁です。今、私達一人一人が北方領土問題に関心をもち、知ること。それこそが解決への糸口となるのです。

漁業と北方領土

よねもと かいと
米本 開人

しかべちょうりつしかべ
鹿部町立鹿部中学校3年(北海道)



漁港でつややかにうろこを光らせる魚体の良い鮭。漁師達が山積みになったその鮭を選別しています。マスがずっしりとかかった定置網を協力し合って船の上に引き上げる写真もあります。なんて豊かな海産物に恵まれた島なんだろうと驚きました。それらは戦前の写真でしたが僕にとっては見慣れた風景そのものでした。僕の家は代々北海道の鹿部町という町で漁業をしています。過去の問題だと思っていた北方領土の問題が一気に自分の身近に迫ってきました。北方領土に住んでいた元島民の方が豊かな漁場を奪われたときにどんなに辛い思いをしたのかということをはっきりと想像することができました。

なぜなら、漁師にとって、漁場がどんなに大切かわかっているからです。漁業や養殖をする際に漁場のことを知っておくことはとても重要なことです。季節や天候によっても魚が捕れやすい場所は変わります。ホタテの養殖もほんの少し場所が変わるだけで、身の締まり具合や成長の早さなどが変わってしまいます。それらの知恵は長年の経験によって、代々受け継がれていくものでもあります。

また、漁業にとって地域の共同体というのとはとても重要です。島民が協力し合って漁をしていたということは写真からもわかります。また、島にはそれらの水産資源を缶詰などに加工する工場も建てられていました。そうした漁業から始まる産業が北方領土を豊かな町としていたのです。

北方領土にはどれほどたくさんの人生や思いが詰まっていたのだろうと思いました。命がけで漁業をし、加工場をつくり、日々の生活を送っていた基盤があっけなくソ連によって占領されてしまったのです。元島民に島を返してあげたいと強く思いました。

北方領土がこのような状況になったのは、日ソ中立条約をソ連が日本の負けがほぼ確定しているときに破棄して、北方領土に侵攻したことが原因です。お互い中立な

立場でお互いの国に攻め込まないことを固くたく約束したはずなのにソ連は攻め込んできたのです。

戦争によってこのようになってしまったのであれば、また戦争しなければ北方領土は戻ってこないのでしょうか。

僕は違うと思います。なぜなら、戦争はたくさんの犠牲者を生みます。僕の祖父の兄が戦争に行き亡くなりました。だから、祖父は僕が幼いときから戦争がどんなにたくさんの人の命や生活を犠牲にするのかを話してくれました。また、北方領土に住んでいるロシアの人から戦争で故郷を奪うということは、永遠に続く奪い合いにつながってしまう。

僕達が北方領土のためにできること。それは北方領土についての話を聞き、歴史や現状を知り、なるべくたくさんの立場から北方領土問題について考え、話し合ってみることだと思います。元島民の方にお会いして実際にお話を聞くことで、僕の意識は変わりました。何とかしたいと強く思い、さまざまなことを知りたいと思いました。これからは僕自身が北方領土のことを語り続けるよう努力していきたいです。

北方領土問題は過去の問題ではありません。今も起こり続けている問題なのです。

北方領土の返還を願って

その さ え か
園 彩瑛花

かわさきしりつのがわ
川崎市立野川中学校2年(神奈川県)



北方領土の四島は、日本の領土なのにロシアに占領されていることはニュースなどで知っていましたが、詳しくは分かりませんでした。中二の社会科で勉強しましたが、教科書には北方領土についての資料が少なく、詳しくは分かりませんでした。先日担任の先生が択捉島視察のため渡航した体験談を聞き、ますます北方領土問題について関心が高まりました。

北方領土を地図で見ると、北海道の根室半島と知床半島の沖合にある島で、択捉、国後、色丹、歯舞群島の四島です。歯舞群島は北海道本島に一番近い位置にあり、約4Kmの距離だそうです。たった4Km先の島を自由に訪問できなくなってしまったのは、なぜでしょうか。

北方領土はかつてアイヌ民族が先住し、その後日本人が開拓し、歴史をたどってみても古来から日本固有の領土だそうです。北方領土は水産と森林資源が豊富で、山は植物、動物が生息し、自然豊かなところだそうです。

私の祖父に北方領土について聞きました。すると驚くことを聞かされました。それは私の故曾祖父の姉が昔、樺太(サハリン)に住んでいて、曾祖父も樺太で仕事をしていた時期があったそうです。樺太は稚内の北にある島で、終戦前まで樺太の南半分は日本の領土で、日本人が暮らしていたそうです。曾祖父の職業は大工で、当時の樺太はにしん漁が盛んで、にしんを入れる箱作りを依頼され、岩手からはるばる樺太へ出稼ぎに行ったそうです。昔の樺太は漁業、林業、農業、製紙業、炭鉱が盛んで日本本土から樺太へ大勢の人々が移住していたそうです。学校や町、駅、墓地、神社など、写真で見て、ごく普通の日本の風景でした。

1945年8月、第二次世界大戦で日本が敗れ終戦。ソ連軍は南樺太を侵攻し、空と海岸から上陸し、すさまじい射撃で日本人を強制退去させ、ほとんどの島民は北海道へ送還されました。命を落とした人もいたそうです。この時を境に、南樺太はロシアに奪われました。その数日後、ソ連の勢力は増して北方領土の択捉、国後、色丹、

歯舞群島を次々と不法に占領し日本の領土を奪って、日本人を追い出しました。とても悲惨な出来事だったことを知りました。

戦後71年を経過した今も北方四島はロシアに占領されたままです。日本政府はロシアに対し、北方四島の返還を粘り強く求めています。両国の意見の違いで解決は難しい現状です。元島民の高齢化が進み、貴重な記憶を次世代に語り継ぐ人がいなくなることが心配です。その結果、領土問題が薄れたり諦めたり、無関心になってはならないと思います。

私の祖父も自分の父から樺太の体験談と写真や地理などの記憶を大切に残していました。今回の学習をきっかけに「子や孫に祖先の話を伝えられて良かった」と話していました。私も祖先のルーツを知り北方領土と深いつながりがあり、とても身近な問題であることを知りました。

北方領土問題を平和に解決するために、政府間の外交だけでなく、国民一人一人が真剣に考えなければならぬと思います。私達にできることは、北方領土の歴史や元島民の思いを学び、日本の領土であることを伝えながら多くの人々に興味を持ってもらうことが大切だと思います。

戦後71年が経ち、日本とアメリカは友好関係を築きました。沖縄、小笠原諸島、奄美もアメリカから日本へ返還された領土です。日本とロシアもお互いの立場を理解した友好関係を築き、北方領土の復帰を実現させたいです。そして未来に向け両国が平和の架け橋となる新しい形の北方領土で、「共生できる特別な島」にできると素晴らしいと思います。